

磯田道史の

この人、その言葉

陸奥宗光 (1844~97)

凝すべし。

事の失敗に屈すべからず、失敗すれば失敗を償ふ<sup>だけ</sup>丈の工夫を

陸奥宗光は坂本龍馬が拾い上げた人物だ。生家は紀州徳川家重臣800石という志士としては飛びぬけて高い家柄だが父が失脚。8歳から母と流離。遊歴のなかで龍馬に出会った。龍馬は陸奥の才を見抜き勝海舟の塾に勧誘。亀山社中・海援隊でその手腕を使った。「海援隊士中、団体の外に独立しても志を達成できるのは、おれと陸奥だけ」。龍馬の言葉だ。外国語のわかる彼は維新後、

新政府の高官になったが、西南戦争の際、土佐士族と通謀し監獄に5年。だが伊藤博文が陸奥のすゝさを知っていた。欧米外遊後、陸奥は再び政府で重用される。外務大臣として条約改正や日清戦争で八面六臂の活躍をした。

この苦勞人は息子広吉が外交官になった時、六つの訓を与えている。①諸事堪忍すべし、堪忍の出来る丈は必ず堪忍すべし、堪忍の出来る

る事に会すれば、決して堪忍すべからず。②が冒頭の言葉。「③名譽は実力で取り得るものに、僥倖に求め得られるものではないと知れ。④人より少なく勞苦して人より多くの利益を得ようとするのは薄志弱行の者のやることだ。この考えが一度芽生えたと、必ず生涯不愉快の境遇に陥る。⑤人生には危険が多い。避けるだけには避けよ。しかし避けられぬ場合、また避けては一分が立たぬ場合、また避けては一分が立たぬ場合はいかなる危険も避けるな。ぬ場合はいかなる危険も避けるな。⑥眠くなく、旅中、舟や車で、やることがないときは、胸中に何なりとも一つの問題を設けて研究しておけ。他日、その問題が実地任用になるとき大いに役立つはずだ」。また陸奥は息子に「日本人には「ノ」者」と云ふことの出来るものが少なくて困る」とよく言っていたという（『父陸奥宗光を語る』）。

（歴史学者・茨城大准教授）